

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530816

研究課題名（和文） 近代日本における中学校・高等女学校の学校文化とジェンダー

研究課題名（英文） School Culture and Gender of Middle School and Girls' Middle School in Modern Japan.

## 研究代表者

小山 静子 (KOYAMA SHIZUKO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：40225595

研究成果の概要（和文）：本研究では、制度史的な視点から中学校教育と高等女学校教育の比較検討を行うとともに、中学生や高等女学生が読む雑誌の記事を分析した。その結果、1920年代の中等教育改革論議での議論の特徴や、中学校と高等女学校の制度設計のあり方の違い、修身教科書と生理衛生教科書における記述の相違、少年雑誌・少女雑誌の文芸欄におけるテーマと文体の違いが明らかになり、中等教育におけるジェンダー構築のありようを解明することができた。

研究成果の概要（英文）：In this research, based on a viewpoint of the history of school system, comparative analyses of the education of middle school and girls' middle school are conducted, along with the analyses of the magazine articles read by middle school students or girls' middle school students.

As a result, the followings are clarified: characteristics of the discussion on the secondary education reform in the 1920s, the differences of structural designs of middle school and girls' middle school, the differences of textbook contents between *Shūshin* (morals) and *Seiri-eisei* (physiology and hygiene), and the differences of themes and styles in the literary columns of boys' magazines and girls' magazines. This research achieved to clarify the framework of gender construction in secondary education.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：中学校、高等女学校、学校文化、ジェンダー

## 1. 研究開始当初の背景

この研究を開始するにあたっての問題関心は2点ある。1つは、近年、ジェンダー概念をめぐる理論的深まりによって、これを

いた教育史研究が進展してきたが、教育史研究において、ジェンダー概念を用いた研究の必要性が語られるようになったのは1990年代に入ってからであり、他の研究領域に比べ

ると、研究の蓄積は未だ乏しいと言わざるをえないということである。またたとえジェンダーという語を用いて教育史研究が行われても、それが単なる「女性」や「男女の関係」の言い換えである場合も多いのが実情である。

2つには、もともと教育史研究においては、性別に着目した研究は女子教育史研究として行われており、それは教育史の空白を埋める補完史として位置づけられていたということと関連している。女子教育史研究は、男子とは異なる女子という存在に焦点を当て、女子教育理念としての良妻賢母思想や、裁縫や家事などの女子特有の教育内容、あるいは女子教育制度などを考察の対象としてきた。また女子教育史の対語として想定しうる男子教育史という研究領域は存在していない。しかしこのことは、男子教育史が存在しないということではなく、男子の教育が「教育」という名の下に、あたかも性別という要因が介在しない「一般的・普遍的」なものであるかのように扱われ、それとの偏差において女子教育史が語られていたことを意味しており、このような研究状況には問題があるといわざるをえない。

このような2つの問題関心から本研究は出発しており、これまでの認識枠組みを相対化し、新たな認識枠組みで教育事象を分析していくことをめざすものである。そしてそれこそが、ジェンダー概念を用いた教育史研究ということになるだろう。中等教育におけるジェンダー構築を明らかにしようとする本研究は、まさにこのような認識論的な転回に基づいた研究であり、単に中等教育において男女でどのような相違が存在していたのかを明らかにするものではなく、その相違を生み出す構造こそを問うものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、男女別学体制が貫徹し、「男子向きの教育」と「女子向きの教育」とが明確に存在していた、戦前の日本における中等教育機関である中学校と高等女学校に焦点を当て、両者を比較する中から、ジェンダーによる教育の違いや中学生と高等女学生の文化の差異がどのようなものとして存在していたのかを明らかにしようとするものである。そのことを通して、教育という営みにおいて性別カテゴリーがどのように作動し、再生産されているのか、そしてそれがどのような中学校と高等女学校の学校文化を形成しているのか、歴史的に解明することをめざしている。

しかも単なる歴史研究にとどまらず、現代的問題の解明に対して寄与することもめざしている。現在、男女共同参画（ジェンダー

平等）の推進が教育のみならず、さまざまな領域において行われ、その実現は現代社会において喫緊の課題として存在している。このような状況において教育史研究がなしうることは、今日、解決すべき課題として認識されている教育におけるジェンダーの不平等が、いかにして、そしてどのようなものとして形成されていったのかを歴史的に明らかにすることである。このような歴史的考察を抜きにしては、教育におけるジェンダー平等とは何を意味するのか明らかにしえないだろうし、教育におけるジェンダー平等を進めていくことは困難であるといわざるをえない。すなわち、本研究から得られる歴史的な知見を通して、現在進められている教育におけるジェンダー平等の内実を明確にとらえることができるのであり、この点にも本研究の目的が存在している。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者と研究分担者、各1名からなっているが、実際には他に5名の研究協力者の協力を得て行う共同研究である。総計7名が2つの班、すなわち、中学校と高等女学校の教育制度・教育内容の比較研究を行うグループと、少年文化と少女文化の比較研究を行うグループに分かれ、少年雑誌や少女雑誌、教育雑誌、新聞に掲載されたさまざまな記事、あるいは中学校と高等女学校で使用された教科書などを主な史料として用いながら、歴史研究を進めていく。そして随時、相互に研究情報を交換しながら、研究代表者が研究分担者や研究協力者の研究の進捗状況をとりまとめ、研究情報の共有化を図る。

具体的にいえば、前者の研究（中学校と高等女学校の教育制度・教育内容の比較研究）に関しては、中学校と高等女学校における、教育制度上の相違や制度改革構想の内容、修身教科書や生理衛生教科書の比較分析、教科書としての体育や音楽の意味づけを検討する。後者の研究（少年文化と少女文化の比較研究）に関しては、『日本少年』や『少女の友』のような、少年雑誌と少女雑誌にあらわれた「文芸」のとらえ方の相違や、同性同士の友情やセクシュアリティ観などを考察する。

これらの分析を通して、中等教育においてジェンダーによる差異がどのようなものとして存在しているのか、そこにはどのようなジェンダーの非対称な関係性や階層性が存在しているのか、総体的に考察する。

## 4. 研究成果

研究によって新たに得られた知見は、以下の通りである。

(1) 中学校と高等女学校の間に、修業年限や学科目の相違があったことはよく知られている。しかし今回、中学校と高等女学校の教育制度を詳細に比較検討した結果、このような相違だけでなく、男女別学の中等教育には、以下の点においても注目すべき相違が存在していたことが明らかになった。

1 つには、高等女学校にも中学校にもあった「実科」の教育内容の問題である。「実科」と科目名称は同じでも、高等女学校の実科は裁縫教育を主に指していた。そしてそれは、高等女学校教育に対する裁縫教育の充実を求める声に応え、女子の都会への遊学志向に対処し、親元に女子を引き留めるために生まれたものであった。それに対して中学校における実科は、実業教育を主に指しており、それは進学志向の増加者に対する対処という課題から生じていた。中学校教育には、高等教育の予備教育なのか、中等教育の完成教育なのかという問題が常に存在していたが、実科という教科が中学校に置かれたということは、中学校を完成教育という視点からとらえるということを意味していた。それに対して、高等女学校にはこのような問題は存在していない。それは高等女学校を卒業した後は、進学することなく、結婚して主婦となるというライフコースが女性には期待されていたからであり、このような男女観の相違が、実科という教科の内実の違いを生み出していたと思われる。

2 つには、中学校は業績主義にのっとりて試験を重視し、落第や成績不良者に対する退学規定や飛び入学の制度も存在していたのに対して、高等女学校には中学校のような厳格な試験が制度的に存在していなかったということである。というのも、中学校は高等教育機関への接続問題を常に意識せざるをえず、進学するに価する学力をいかに形成するのかという問題が存在していた。それに対して、女性が高等教育機関へ進学することはさほど高等女学校の教育において考慮されないことであり、高等女学校は完結教育として制度設計されていた。このような両者の相違が試験の問題にも現れている。

これらの制度上の相違には、男女の役割を明確に異なったものとみなす男女観が深く関わっていたと考えられる。すなわち、男性は中学校を卒業後に、あるいは高等教育を受けて後に仕事に就く、女性は結婚して良妻賢母となる、という男女の期待される役割が存在していたがゆえに、このような中学校と高等女学校の制度上の相違がもたらされたのであった。

(2) 1920 年前後から中等教育機関への進学者が急増するが、それは中等教育の意味づけや性格が変化していくということである。そ

れにもなつて、文政審議会などで中等教育に関する改革論議が行われ、『教育時論』などの教育雑誌でも盛んに改革論議が展開されていった。

これらにおいてどのような議論が行われていったか検討したが、その結果明らかになったこととしてまず指摘しておきたいことは、高等女学校教育よりも、中学校教育のあり方が活発に議論の俎上にあがっていったということである。すなわち、中学校の修業年限や教育をめぐる論議が、高等女学校教育のあり方や良妻賢母理念を意識しながら行われ、「男らしさ」のありようも青年心理の視点から議論されていった。また中学校教育の改善案においては、中学校の教育課程が高等女学校の教育課程に接近していくことが明らかになった。

従来の中等教育論議は、男子の中学校教育を参照軸として高等女学校の教育を考えるという認識枠組みに立脚していたが、それがここでは転換しつつあることが見てとれる。その詳細についてはこれからさらに検討を重ねていかねばならないが、改革論議の検討からこのような知見が得られたことは重要であると思われる。

(3) 中学校と高等女学校の教育内容に関しては、主に、湯原元一、友枝高彦、林博太郎が執筆した修身教科書と、石川日出鶴丸と丘浅次郎が執筆した生理衛生教科書を比較検討し、そこに書かれている内容の相違を考察した。

その結果、修身教科書では男子に立志、勇氣、我慢、女子に品位、貞操、母性、愛が求められていることや、高等女学校の教科書には家族道徳は女性道徳が多数掲載されていることが明らかになった。また高等女学校の修身教科書では、男女の本質的な性質や体質の違いゆえに性別分業が存在することや、配偶者選択のあり方も論じられていくのに対して、中学校の教科書にはこれらのことはほとんど掲載されていないことも明らかになった。

また生理衛生教科書においては、人口問題や優生学が「母」としての女性と結びつけて論じられており、この点においては男子用も女子用も違いがない。ただ、とりわけ女子用の教科書において顕著なのは、男女の身体の相違を本質的なものとして強調する傾向があることであり、女性の体についての説明が、もっぱら出産や育児との関わりにおいて説明されているという知見が得られた。

(4) 中学生や高等女学校生が少年雑誌・少女雑誌に文芸作品を投稿することにはどのような意味があり、少年雑誌・少女雑誌の編集者がそのことをどのようにとらえていたの

か、『日本少年』と『少女の友』を史料として考察した。

その結果、1900～1910年代、自らが執筆した文芸作品が雑誌に掲載されることは、男女ともに非常に名誉なこととしてとらえられていたが、女子の場合は、名誉以上に、投稿仲間同士の交際に価値が見出されていたことが明らかになった。

一方、編集者は文芸、なかでも特に叙述するテーマと文体に関して、ともに「現実」に根ざしたテーマと表現をもつものを「子どもらしい」とした点においては共通していた。しかしその際に、絶えず文芸作品を「少年らしさ/少女らしさ」と結び付けて解釈しており、少年には「勇ましい」作品、少女には「美しい」作品を、それぞれ「少年らしい文芸作品」「少女らしい文芸作品」とするという相違があった。少年雑誌や少女雑誌に文芸作品を投稿するという行為であっても、そこには明確なジェンダー観の伝達が行われていたことがわかる。

以上4点にわたって研究を通して得られた成果を指摘してきたが、これらの点は、これまでの研究では必ずしも明確にされていなかったことである。これらのことは、いずれも中等教育におけるジェンダー構築をよりの確に考察するためには必要不可欠なことであり、これらが明らかになった意義は大きいといえるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 今田絵里香、1945～70年の少女雑誌とジェンダー、京都大学 GCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」ワーキングペーパー、査読無、50巻、2011年、1～13ページ
- ② 今田絵里香、戦後日本の『少女の友』『女学生の友』における異性愛文化の導入とその論理、大阪国際児童文学館紀要、査読有、24号、2011年、1～14ページ

[学会発表] (計6件)

- ① 今田絵里香、作文・綴方教育と少女雑誌文化、日本教育社会学会、2012年10月28日、同志社大学
- ② 今田絵里香、学校文化と少女雑誌文化、シンポジウム「学校文化の源流—近代日本の「学び」の風景」、2012年10月6日、学習院大学

- ③ 今田絵里香、The Image of Boys and Girls in Modern Japan and Korea、2011 International Conference “Imaging Asia through Cultural Production and Consumption”、2011年11月26日、ソウル大学 (韓国)

- ④ 小山静子、男女共学と純潔教育の登場、教育史学会、2011年10月2日、京都大学

- ⑤ 今田絵里香、男女共学と少女雑誌における異性愛表象、教育史学会、2011年10月2日、京都大学

- ⑥ 今田絵里香、少年少女にとって文芸とは何だったのか、日本教育社会学会、2010年9月18日、関西大学

[図書] (計5件)

- ① 小山静子、ミネルヴァ書房、よくわかるジェンダー・スタディーズ、2013年、231ページ (50～51)

- ② 小山静子、Brill、Ryosai Kenbo: the Educational Ideal of ‘Good Wife, Wise Mother’ in Japan、2013年、216ページ

- ③ 小山静子、柏書房、『女学世界』(大正期復刻版) 解題、2012年、18ページ

- ④ 小山静子、不二出版、『日本婦人』解説・総目次・索引、2011年、76ページ (5～18)

- ⑤ 小山静子、学術出版会、続・近代日本教育会史研究、2010年、511ページ (229～249)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

小山 静子 (KOYAMA SHIZUKO)  
京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授  
研究者番号：40225595

##### (2) 研究分担者

今田 絵里香 (IMADA ERIKA)  
成蹊大学・文学部・講師  
研究者番号：50536589